王朝時代末期の庶民墓地

―エジプト・アコリス遺跡の調査(2017・2018 年度)―

辻村 純代 古代学協会客員研究員

川西 宏幸 筑波大学名誉教授

花坂 哲 首都大学東京客員研究員

Non-Elite Tombs During the Third Intermediate Period: Akoris Archaeological Project 2017 · 2018

TSUJIMURA, Sumiyo Visiting researcher, The Paleological Association of Japan, Inc.

KAWANISHI, Hiroyuki Professor Emeritus, University of Tsukuba

HANASAKA, Tetsu Visiting researcher, Tokyo Metropolitan University

1. はじめに

アコリスはカイロから南に230km、ナイル川東岸の河岸段丘上に形成された小規模な都市遺跡である。壁で囲まれた14haの都市の南西部には巨岩が聳え立ち、その北側崖面下方には岩をくり抜いて造った幾つかのトゥーム・チャペルが並んでいる。この神殿域からピヌジェムI世やオソルコンⅢ世の奉献碑文が発見されたことにより、アコリスの都市形成期のようすを知ることのできる場所探しが始まった。

遺跡全体の踏査を実施した結果、漸くその可能性のある地区を特定することができた。巨岩の南側、切り立った崖面の中腹に刻まれた双子神・ディオスクロイ

が見下ろす荒涼とした砂地へ向かって段丘は急斜面を成し、南方で再び立ち上がる段丘斜面との間には約100mの平らな鞍部が広がっている。南方の段丘斜面中腹には帯状に並ぶギリシア・ローマ時代の横穴墓の入り口がみえる以外は砂に覆われていて、土器片すら見つけにくい場所である。

2002年に発掘調査を開始して以来、密集する住居群、円形貯蔵庫群、竈群、革工房など第3中間期の都市の姿が次第に明らかになった。全域で発見される墓は居住地としてこの地が放棄されたのちに墓域として形成されたと考えられる。これまでの調査で北側斜面と平坦地の墓が成人や5歳以上の小児用であるのに対して、南側斜面には胎児/新生児から5歳以下の幼児

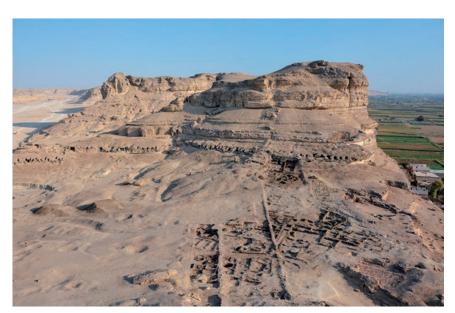
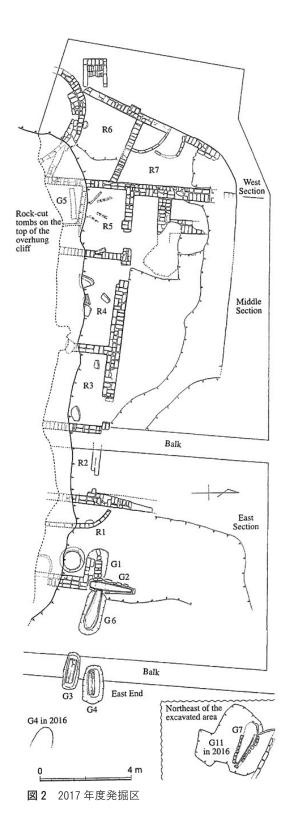


図1 発掘区遠景(北から)

が集中していることがわかった。

2017年度は2017年12月から翌年2月にかけて、 この子ども用墓域の西限を確定するための発掘調査を 行うと共に2016年度に発見したミイラ(2016 G4)の CTスキャニングを実施した。データを日本へ持ち帰 り、2018年3月以降、その解析を行ったので合わせ て報告したい。



2. 子ども用墓域

子ども用墓域は斜面の南半から横穴墓が並ぶ岩山の 崖面直下にせまる。成人には人形木棺、小児以上の未 成人には方形木棺をそれぞれ用いるのに対して、乳幼 児用の棺はバラエティに富んでいる。胎児/新生児は 土器棺、幼児は植物の茎で作った箱形棺の他に魚を入 れる取手付きの編籠を切り裂いたものや簾状に繋いだ 葦を遺体に巻き付けただけのものもあるが、すべての 遺体は亜麻布で巻かれている。

2016年度に調査区の南西隅で人形木棺に埋葬され た成人ミイラ(2016 G4)が発見されたので、子ども用 墓域の西限である可能性があった。しかし、子ども用 墓域の例として挙げられているアビュドスやテル・エ ル・マシュフータでも少数ではあるが女性の成人墓を 含んでいることから子ども用の墓域外とは断定できな い。出産時に亡くなった母親を子どもと同じ墓域に埋 葬したのかもしれないからである。

そこで、2017年度にはさらに西へ調査を進めた結 果、計6基の墓を検出した。調査区の西部で発見され たG5を除くとG1・2・3・4・6は2016 G4に近接し ており、かつ G1・3・4・6 の被葬者は身長からする と子どもであることは間違いない。けれども4体の遺 体はいずれも布にしっかり巻かれているために年齢推 定の有力な根拠となる歯の萌出状態を観察することが できない。G3・4 は方形木棺、G6 は人形木棺で幼児 用の埋葬とは異なっていて、G6の遺体は7-8歳程度 の身長がある。さらに、他とは違って南北方向に置か れた人形木棺(G2)に埋葬されていたのが成人男性で



図3 G2の被葬者頭蓋

あったことは、これらの埋葬が東方の子ども用墓域外 であった可能性が大きい。

30代から40歳前半と推定されるこの男性について 特筆すべきは、巻き毛と豊かな顎鬚・口髭を蓄えた異様な相貌をもっていたことである(図3)。壁画やレリーフに描かれるシリア人、パレスティナ人、ペルシア人には豊かな髭が表現されるが、第1中間期~中王 国時代のミイラマスクを除くとエジプト人にはこのような髭の表現は珍しい。

3. 動物骨

調査区で検出した墓やレンガ壁を覆っていた石灰岩の厚い礫層は岩山の崩落土で、その除去を行った際に中から第26王朝のアマシスのカルトゥーシュを刻んだ木製の杖や同じく末期王朝と推定される木棺の蓋の一部が出土した。これらが横穴墓からの落下だとすると、従来プトレマイオス時代の墓と考えられていた横穴墓の一部は王朝時代に遡る可能性がある。

また、礫層からは大量の動物骨と数体分の人骨が出土した。これまでも居住区を中心に動物骨は少なくなかったが、これほど多くの量がまとまって出土したことはない。礫層からの動物骨はイヌ、ヤギ、ヒツジが突出しており、それにスッポン(図4)、ナマズ、ウシが加わる。居住地ではヤギやヒツジと同じくらい多かったブタはここではほとんどみられず、わずかに礫層直下の黒色土層から出土したにとどまる。ナマズや貝、ネズミも黒色土層に偏る。

イヌが多いのは岩山、特に横穴墓を塒としていたからだろう。人骨はイヌが墓から引きずりだした遺体かもしれない。礫層から出土した動物骨のすべてが墓の中からのものとは言えないまでも、仮にその一部が犠牲獣として墓に関連しているとすると、そこからブタが除かれていることは興味深い。スッポンは居住区か



図4 スッポンの背甲

らも出土しており、専ら食料として利用されたと一般には考えられていたが、デール・エル・ベルシャでは 墓から出土したことから報告者は儀礼に用いられた可 能性を指摘している。

4. ミイラ(2016 G4)の CT 画像

調査区の南西端で発見された人形木棺(2016 G4)の下には赤く染色された革靴(長さ 22 cm)と葦で編んだ履物(長さ 29 cm)各1対が副葬されていた。そして棺に納められたミイラはしっかりと麻布に巻かれ、綻びのない状態であった。しかし、布はじっとりと湿り、棺の内底も濡れている。この湿り気はミイラから染み出したもので、遺体は屍蝋状態を疑わせるほどに弾力があった。なぜ乾燥したエジプトで、ミイラがそのような状態になるのか。たとえ砂漠に鉄砲水が流れ込んだとしても段丘斜面まで水につかるとは考えられない。何もかも不明のまま、ミイラは考古庁の判断で、数十キロ以上も離れたベフネッサの収蔵庫に運ばれてしまった。

ミイラを直接、観察できない場合はCTスキャニングを実施するしかない。対岸のミニアにそれができる病院があると聞き、次年度での実施を期すこととなった。ベフネッサ収蔵庫に納められたミイラを借りだしてミニアの癌センターに向かった。

遺体を入れたままで撮影可能な遺体収納袋に納めら





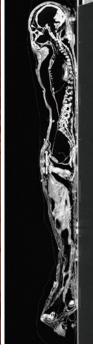


図 5 2016 G4



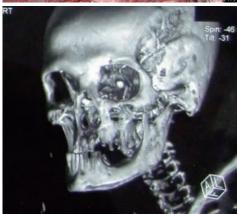






図6 X線画像とCT画像

れたミイラの X 線撮影と CT スキャニングの両方を行った。帰国後、CT スキャニングのデータは Ai 情報センターで 3D 化され、X 線写真と共に医学関係者らと検討を行った(\mathbf{Z} **6**)。

ヘロドトスによると、ミイラ作りには被葬者の社会 階層によって大きく3通りの方法があったらしい。高 級な方法は脳も内臓も除去し、中級では内臓のみを除 去、最も簡便な方法は下剤を用いて腸内を洗浄した上 で、ソーダ漬けにして遺族に引き渡すという。このミ イラは画像でみるように、脳の他に心臓、肺、肝臓が 原位置で体腔に残っているので、最低ランクの処理し か施されなかったことになる。ヘロドトスの記述には ないが、第3中間期のミイラ作りに際してしばしば行 われるのは、一端、内臓を取り出して布に包んだのち 再び体腔に戻すという方法であるが、このミイラはそ うした痕跡も認められない。十分な乾燥がなされない ままに布を巻かれたのであろう。やがて体内に残って いた水分が漏れ出したと思われる。ミイラの縦断画像 をみると、巻き布と遺体上部との間に数 cm の隙間が 生じているのは、こうした事情によるものと推察され る。

取骨下角が広いことから成人女性であることは間違いない。頭頂から踵までの計測値は 140 cm だが、頭を傾げてやや俯き加減であることを考慮すると 145 cm 程度であろうか。王朝時代の成人女性としてはかなり小柄で、この位の身長ならば副葬品の革靴もこの女性の持ち物にふさわしいサイズと言える。

女性は頭蓋縫合線や骨の形状から壮年後期から熟年 初期と推定されるが、驚かされるのはその年齢に比し て劣悪とも言える口内環境である。下顎左右の小臼歯 と大臼歯のほとんどが失われ、歯槽が閉じている。そ して左上顎第2小臼歯、及び左下顎第1切歯の歯根尖 端には歯周病の痕跡が認められるので、このような多 くの歯の脱落は歯周病によるものと思われる。

近年、CT 画像の普及によりエジプトのミイラに多いことが判明したアテローム性動脈硬化症を引き起こす感染性病原体の一つとして注目されているのが歯周病菌である。この女性ミイラの下行大動脈にもアテローム性動脈硬化症の特徴的所見である血管壁の石灰化がみられた。プラークが成長すると、血管の狭窄により心筋梗塞や脳卒中などを引き起こし、死因になりかねない。

アテローム性動脈硬化症が王朝時代のミイラに多く 見られることについて、ミイラの専門家であるロザ リー・デービット博士を代表とする "マンチェスターミイラプロジェクト" グループはミイラが飽和脂肪を多く含む肉などの食材を中心にした贅沢な食生活を送ったエリート層であったからだと主張したが、グレゴリー・トーマス博士をはじめとするアメリカ・エジプト共同研究チームは石灰化が古代ペルーや古代プエブロ・インディアンなど質素な食生活を送った人々にも広く認められることから、その原因は贅沢な食生活ではないと反論している。アコリス出土のミイラも出土状況やミイラの作り方からみて決してエリート層ではなく、贅沢な食生活を送っていたとは考えにくい。

もし感染性細菌がアテローム性動脈硬化症のキー・トリッガーだとしたらクラジミア、ピロリ菌、サイトメガロウイルス、ヘルペスウイルスなども可能性があるけれども、アコリス出土の女性ミイラの場合は歯周病関連細菌が強く疑われる。もちろん、多くの医学関係者が注意喚起しているように遺伝性素因、高脂血症、高血圧、食事、運動不足などがリスク・ファクターであることを否定するものではない。

5. 副葬品

棺外に置かれた革靴と葦製の履物の他に、ミイラの画像からスカラベが発見された。上腕をまっすぐ伸ばし、内側に向かって緩く曲げている前腕の左手首に近いところでみつかったスカラベはおそらく手首に巻き付けられていたのだろう(図6下)。これ以外に、両端が少し膨らんだような形をした護符のようなものが前頭部に見えるが、どんな種類の護符かは不明である(図7)。

ミイラ上面の画像(**図5中央**)をみると、遺体中央か

らは少し右寄りに胸から大腿骨辺りまでほぼまっすぐに伸びる棒か、細長い板切れのようなものが映っていて、密度からすると革の可能性があるという。それは遺体の直上ではなく布の間に置かれているようにみえる。仮に革製だとすると長い革紐の両端に生皮のタブが付いている"ストラ"または"ミイラの締め具"と呼ばれるものかもしれない。

速報:2018年12月~2019年2月の調査で、亜麻工房、 金髪少女のミイラ(12-13歳)を納めた彩色人形木棺、 新生児用革靴(ファースト・シューズ)が発見された。

■参考文献

- · ALLAM, A. H. et al., Computed Tomographic Assessment of Atherosclerosis in ancient Egyptian Mummies, *JAMA* 302 (19),2009 pp. 2091–2094
- DAVID, R., Understanding the lives of ancient Egyptian women in Women in Antiquity (London, 2016), pp. 181–193
- Du Meyer, M. et al., The Role of Animals in the Funerary Rites at Dayr al-Barsha, JARCE 42, pp. 45-71
- ・FILER, J., Disease, 1995(内田杉彦訳『病と風土』, 學芸書林, 1999)
- KAWANISHI, H. et al., Preliminary Report AKORIS 2016 (Akoris Archaeological Project, 2017)
- · KAWANISHI, H. et al., Preliminary Report AKORIS 2017 (Akoris Archaeological Project, 2018)
- · PATCH, D. C., Third Intermediate Period Burials of Young Children at Abydos in *The Archaeology and Art of Ancient Egypt* Vol. II (S.A.E., 2007), pp. 251–268
- · TAILOR, J. H., Mummy: the inside story (The British Museum, 2004)
- TAYLOR, J. H., Ancient lives new discoveries (The British Museum, 2014)
- TAYLOR, J., Body by Darwin, 2015(小谷野昭子訳『人類の進化 が病を生んだ』河出書房新社、2018)
- ・湯本浩通(科研代表者:『歯周病によるアテローム性動脈硬化症 の惹起・促進メカニズムの解明と原因因子の同定』, 2006・ 2007)



図7 頭蓋に置かれた護符



図8 CTスキャニング実施中のミイラ